

# 「菌耕農法」が成果

## 長野で 研究会 地力高め病害抑制

「菌が耕す」土づくりを追求する「菌耕農法」が、稲作や園芸作物、畜産などで成果を挙げている。土壌改良資材などを販売するアスカ（東京都日野市）が提案し、微生物菌製剤を販売する。土壌の団粒化を促して地力を高める他、分解しにくい緑肥や稲わら、もみ殻などの有機物と一緒にすき込むと早く分解して堆肥になるといふ。利用する農家は、病害の発生が抑えられ、収量や品質の向上につながると評価している。

この菌製剤には、好気

性菌の枯草菌、嫌気性菌など10種類の菌の胞子が含まれている。アスカがこのほど長野県内で開いた研究会では、同農法を実践する農家から事例報告があった。

稲作農家は、土壌から発生が少なく、根張りが良くなり倒伏しにくくなるため、「収量と品質が向上した」と報告。同社は千葉大学大学院と水田から発生するメタンガス発生抑制試験の共同研究に取り組み、微生物菌製剤を施用した稲わらの分

解促進とガス発生抑制で効果を確かめている。畑作や施設園芸、果樹では共通して「団粒化が進んで土壌が軟らかくなり、保水性や排水性、通気性が改善した」との声があった。

畜産では、敷料のおがくずやもみ殻に菌製剤を散布すると2週間ほどで発酵が始まり、臭いが薄くなる。「悪臭のストレスから解放され、肥育牛の肉質が向上した」との報告があった。堆肥は発酵温度が60度以下と高温にならず、「有用菌が死滅せず切り返し作業が少なくて済む」といった省力効果も報告された。ただ、同農法の効果を

持続させるには「少なくとも3年以上は連用する必要がある」との声もあった。

「菌耕農法」の問い合わせはアスカ、☎042(593)5951。